

社会保障の現状と課題

介護を事例として

流通経済大学大学院 宇野点子

1 目的

この報告の目的は、日本の社会保障の現状として、介護（高齢者福祉）を取り上げ、問題の抽出と提言を行うことである。介護を取り上げたのは、介護ケアのあり方が制度的に質を落としたものとなっており、それによって大量の寝たきり・認知症の高齢者が、政策、病院・施設経営者、専門職によって構造的に生み出されている。このことを看護師で働いていたときに感じ、問題だと思ったからだ。過酷な労働によって、介護士の腰痛は深刻になっている。一方、高齢者達は、施設ではオムツを着けて抑制され、在宅では、尿チューブを入れられ、放置されていたり、オムツの交換が少ないために布団全体も本人も尿まみれで寝かされていたりしており、ケアを受けていると言っても、ひどい状況にある。

2 方法

寝たきり・認知症の高齢者が構造的に生み出されていることを、政策、文献、ヒアリング等から示す。

3 結果

分析の結果は以下の通りである。近年の医療・福祉改革では、高齢者の増加と、それによる医療・介護費の増大が懸念されるとして、高齢者の処遇に焦点が当てられている。尊厳死法案による高齢者の胃ろうの中止の提案、救急医療を利用した臨終ではなく看取りケアへの移行、企業による介護ロボットの開発・販売・輸出、施設・在宅での介護ロボット活用促進がすすめられている。介護ロボットに関しては、腰痛の原因であり介護者の負担が最も大きい排泄支援機器に補助がつけられており、広く普及していくことが予想される。政策は、ロボット導入の結果も入れて今後改正していくこととしている。今後、介護も医療も実施主体と財源が自治体へ移行する。かつて障害者福祉が自治体に移った時に、多くの自治体で破綻する危機が生じた。その経験を持つ為、自治体は慎重になり、有償化や削減を進める恐れがある。そうした中で、在宅推進によって、施設経営はより厳しくなる。ゆえに、介護ロボットを使うことで人員削減が進められることが予想される。現在、国民の多くは、非正規で働き、低所得者が増え、年金や国民健康保険の支援縮小が懸念されており、現在でも、年金未納や、受診控えなどが起きており、貯金もままならない人が増えている。この人たちが高齢者になったときに受けるケアは、今よりもひどいものになるかもしれないのである。専門職は、経営者の支配の下にあり、高齢者達の代弁者ではなく、管理者になってしまっている。自分たちのケアによって、構造的に寝たきり・認知症の高齢者をつくり出している意識が低い。高齢者や家族は、提供されるケアに我慢している。こうした専門職や高齢者や家族達の適応が政策の進行を黙認することになっている。

4 結論

以上から、高齢者の尊厳は侵害され、専門職は理想から乖離したケアを行い続ける。この介護に、高齢者福祉の統合が目指されており、このままでは、日本の福祉がだめになり、人は絶望のまま死んでいく時代になる可能性があるのである。この事実を国民に広く知ってもらい、自分たちのこととして向き合い、考え意思決定していくことができる社会になる為にはどうしたらいいのかも加味して考察と提言を行う。

文献

二木立, 1998, 『保健・医療・福祉複合体 全国調査と将来予測』 医学書院.
三好春樹, 2005, 『ウンコ・シッコの介護学』 雲母書房.